

● エコステーション（環境教育）の取り組み

団員 武田 浩一

平成26年度松山市議会議員海外都市行政視察の内、環境教育のテーマ担当として、私からは、エコステーションの取り組みについて報告する。

1. はじめに

エコステーション・フライブルクは、BUND(ドイツ自然保護連盟)と呼ばれるNGOが運営していて、姉妹都市であるドイツのフライブルク市にあり、環境問題対策の先進地であるフライブルク市のパイオニアを目指して作られ、エコステーションに使用されている建材は自然の物で、主構造が丸太、壁は自然石と粘土で、屋根は草で屋上緑化されていた。



(エコステーションでの講義)

また、部屋の中心には八角形のホールがあり、そこで研修等ができるようになっていた。

この施設は、都会でも自然を取り入れることができること、鳥や小動物、昆虫が身近にいることを市民に見てもらい、そして、ゴミの堆肥化



(野生ミツバチ産卵用ボード)

など、実際に何に取り組めば環境保全に貢献できるのか、また、自然循環できるかを知ってもらうといった目的のため、約5,000㎡の庭をできるだけ自然に近い形に作っていた。

今回の視察では、現地時間で1月22日の14時30分からエコステーションの共同代表であるスベェーニャ・ファクマンさんから、現地庭園を見ながら、また、ホールにおいて資料に基づき説明をしていただいた。

2. 緑の教室

庭園にある緑の教室は、1クラス20～25人の子どもたちを対象に、学校の先生の希望で授業として行われ、野生の小動物観察や1㎡内にどんな昆虫がいるか場所を変えて観察、また、ハーブを取り入れたガーデニング方法とハーブを使った健康的な調理方法などの実習や野生ミツバチの産卵用ボードの設置など幅広いイベント、セミナーを開催することにより、生活の中でもう一度自然と出会い、自然のすばらしさに感動し、自然を愛するところを育む教育を行っている。五感で体験した子どもたちはずっとその感覚を覚えており、環境保護意識の高い大人に成長していくとのことで、1年間に約15,000人がエコステーションを訪れていた。

3. ドイツの環境政策

エコステーションのホールに移動し、環境問題を環境保全へと誘導させる環境税制が存在し、それが環境意識を高める要因になっていると共に、公共交通網の整備や自然エネルギーの開発など、環境負荷の軽減に寄与しているとの説明を受ける。

ドイツの環境税は、税收の全てを環境対策に充てるのではなく、むしろそのほとんどを年金財源などの社会保障費や雇用対策に充てていて、持続可能な社会の発展と安定を目指した政策を展開している。

また、市民の生活に直接関わっている制度として、飲料容器のデポジット制度がある。これは、缶やペットボトルなど使い捨て容器が利用される飲料に対して、その包装廃棄物の量を抑制するため、再利用を促すための前払い料金を課すものである。

ドイツでリサイクルするためには、アジア等の大規模工場に輸出してまた輸入する必要がありコストがかさむために、リサイクルよりリユースが主流であり、多くの飲み物がガラス瓶容器で販売されている。

4. まとめ

ドイツは、ゴミの排出量が非常に少ないと実感できた。例えば、園児が遠足に行っても、ゴミはバナナの皮かリンゴの芯ぐらいしか出ないそうである。クッキー、キャンディーなどを買う時は、瓶容器に入っているものを自分で取って買い、それをタッパーに入れて持っていく、また、果物もタッパーに入れて持っていくことを全員が実施しているため、家庭では包装用ゴミが多少であるかもしれないが、遠足等の外出先では、ゴミはでないとのことで、子どもの頃からの環境教育が大切であると痛感した。

今回のエコステーションの取り組みは、法制度や文化等の環境が異なることもあり、そのまま本市に取り入れることはできないが、この視察で得た知識を松山市の健全な発展に活かしたい。最後にスベェーニャ・ファクマンさんはじめ関係者の皆さんに感謝し、環境教育(エコステーションの取り組み)についての報告とする。



(共同代表のファクマンさんと)